

言語活動を行う素地を培う国語科の指導 —学びを支える「手引き」の活用を通して—

大分市立上野ヶ丘中学校 白石 麻利江

はじめに

大分市の小・中学生は、各種学力調査の全実施教科で、概ね全国平均の結果を収めている。その反面、平成26年度全国学力・学習状況調査では、学力定着の最終段階としての中3において、国語B・数学B（活用力）の結果で全国平均を下回った。更に、平成26年度、平成27年度と同調査において、数学Bの無回答率が高い傾向にあり、思考力・判断力・表現力育成の指導の充実が課題に挙げられる。

本校においては、組織的・計画的な取組を続けてきたことで、各種学力調査では、全学年の全実施教科で高い学力定着の状況が確認できた。生徒意識調査からは、自尊感情の高さも確認できる。一方、個々の生徒に目を向けると、真面目な学習態度が定着しているものの、授業や家庭学習では受け身の姿勢が見られ、学習意欲を喚起し、積極的に学びに向かおうとする力を高めることに課題があると言える。

現行の学習指導要領では、基礎的・基本的な知識・技能の定着に加えて、学習意欲の喚起と思考力・判断力・表現力の育成が必要とされている。同時に、それらの育成の手立てとして、言語活動を重視すべきであるということが強調されており、国語科においては、さまざまな言語活動を通じた指導をスムーズに行うための基盤づくりが求められている。

以上のことから、言語能力育成の中核を担う国語科として、その役割を一層自覚し、言語活動の基盤づくりを効果的に進めたいと考えた。そこで、本研究においては、言語活動の基盤について整理するとともに、基盤づくりを進めるための国語科の学習指導の在り方を探り、実践につなげるための手立ての確立を目指すこととした。

I 実態と研究の方向性

1 実態把握

(1) 生徒の実態

① 実態調査の方法と内容

「国語科学習に対する関心・意欲・態度」「言語活動

を行う素地に関すること」について、生徒の実態や課題を明らかにするために、授業観察及び本校1年生6クラス166名を対象に質問紙による調査を実施した。

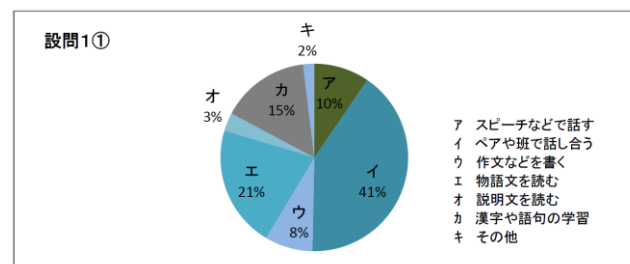
② 調査結果と考察

言語活動を通じた学習への意欲を把握するための問いでは、高い意欲を示す生徒が70%を超えた。その理由として、話し合い活動の中で自分の意見を知ってもらったり他の人の意見を知ったりする喜びや、表現するために文章にまとめてみることで新たな気付きによる喜びなどを挙げていることが分かった。一方で、言語活動を通じた学習への意欲をもちにくい生徒の多くが、表現の手順や方法が分からないことを理由に挙げており、言語活動を支える手立ての必要性が強く感じられた。

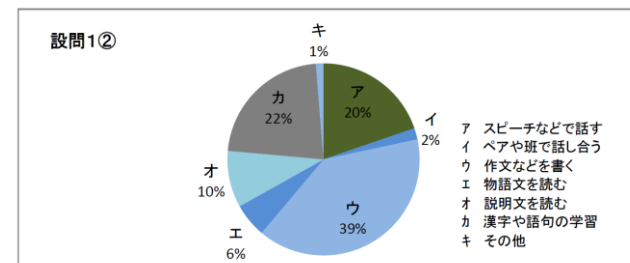
また、国語科学習については、資料1に示すように、ペアや班で話し合うことを好きな内容に挙げる生徒が多く、「話すこと・聞くこと」を好む一方で、「書くこと」への苦手意識が強いことが分かった。

<資料1> 実態調査結果（生徒）

設問1①「国語の学習の中で好きな内容は何か。」



設問1②「国語の学習の中で苦手な内容は何か。」



苦手意識の理由として、「途中から題にそって書けずに違う話にいたり同じようなことを繰り返したりしてしまうから」「どんな順序で書くかわからず、文がごちゃごちゃになるから」等が挙げられており、書くときに

全体を見通して考えをまとめる力や、内容を整理して文章を構成する力などを育む手立てを整え、苦手意識を取り除く工夫をすることが必要であると感じた。

(2) 言語活動を通した指導の実態

① 実態調査の方法と内容

「言語活動を通した指導における成果と課題」「言語活動を通した指導における国語科との連携に関すること」について明らかにするため、本校国語科及び各教科教員を対象に質問紙による調査を実施した。

② 調査結果と考察

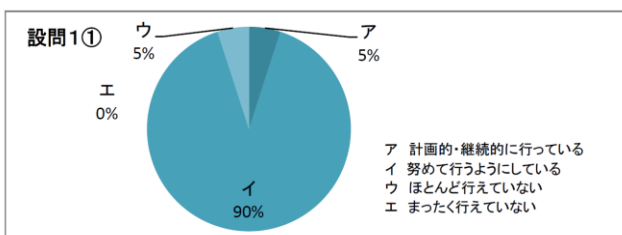
回答者の大多数が、日頃の授業の中で、指導のねらいに即した言語活動を位置付けることに努めている様子がわかった。言語活動を通した指導の充実への意識の定着がうかがえる一方、計画的・継続的に実施できているという回答は極めて少なかった。

また、全回答者が言語活動を通した指導を行う上で何らかの困りを抱えていることもわかった。言語活動を行う前提としての、生徒の能力差の問題や苦手意識の問題に触れる回答も多く、言語活動を行う基盤づくりの必要性が強く感じられた。

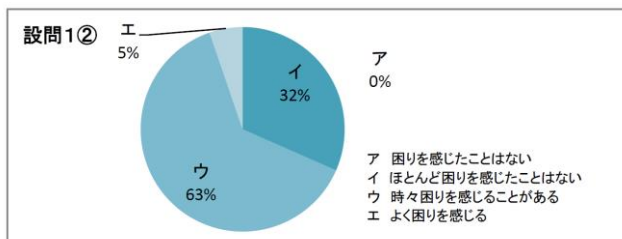
更に、国語科との連携が必要であると思う能力について尋ねたところ、要約する力・説明する力・論述する力を求める回答が多かった。国語科教員2名の回答では、「書くこと」における生徒の実態が困りに挙げられており、生徒対象の質問紙調査で明らかになった苦手意識と一致していた。

<資料2> 実態調査結果(教員)

設問1①「日頃の授業の中で、指導のねらいに即した言語活動の位置付けができているか。」



設問1②「言語活動を通した指導を行う上で、指導方法について困りを感じることはあるか。」



2 言語活動を行う素地の分析

言語活動を行う能力を確実に身に付けさせることについては、「言語活動の充実に関する指導事例集」でも示されている。本研究においては、各教科等における言語活動を充実させる基盤としての、言語活動を行う能力と意欲のことを、「素地」として考える。まず、現行学習指導要領と「言語活動の充実に関する指導事例集」をもとに、言語活動を「記録」「要約」「説明」「論述」「討論」に分けて考え、素地の分析・整理を行った。

<資料3> 素地一覧(論述)

言語活動例(「言語活動の充実に関する指導事例集」より)	素地	国語科の指導事項
論述 (社) 知識を活用して特色を説明し、さらに自分の考えを論述する事例 (数) 数学的活動の成果をレポートにまとめ、自分の考えを深める事例 (理) 仮説を立てて実験を行い、その結果を分析し解釈する事例 (音) 音楽の特徴などを自分なりに言葉で表す事例 (総) 聞き取った内容を再構成して論文にまとめる事例	○目的や意図を自覚する力 ○集めた材料を取捨選択して文章を構成する力	・考えたことなどから書くことを決め、目的や意図に応じて、書く事柄を収集し、全体を見通して事柄を整理すること。 ・集めた材料を分類するなどして整理するとともに、段落の役割を考えて文章を構成すること。
	○自分の考えや気持ちについての根拠の明確さを吟味する力	・伝えたい事実や事柄について、自分の考えや気持ちを根拠を明確にして書くこと。
	○書いた文章を読み返し、よりよく整えようとする力	・書いた文章を読み返し、表記や語句の用法、叙述の仕方などを確かめて、読みやすくなりやすい文章にすること。
	○異なる見方から文章を検討する力	・書いた文章を互いに読み合い、題材のとらえ方や材料の使い方、根拠の明確さなどについて意見を述べたり、自分の表現の参考にしたりすること。

資料3は、その一部である。表の中央に言語活動の「素地」、左には素地を用いて行われる言語活動例を挙げた。言語活動例は、学習指導の実際についてイメージしやすくするため、「言語活動の充実に関する指導事例集」における事例を吟味し、抜粋した。「論述」の場合では、社会・数学・理科・音楽・総合的な学習の時間より5つの事例を示している。また、右には、国語科の学習指導における指導事項を示した。これは、言語活動の素地育成に関連する国語科の指導内容が見えるようにするためである。中学校国語科の指導事項を基本に、系統性も踏まえ、小学校国語科の指導事項にも目を向けて、言語活動の素地を効果的に育成することを目指して配置した。

3 研究の方向性

(1) 研究課題

実態調査で明らかになった現状と、培うべき言語活動を行う素地との比較などを通して、次のような研究課題を設定した。

○積極的に学びに向かおうとする力を高めるとともに、素地を培うための手立てはどうあるべきか。

(2) 具体的な研究内容

上記の研究課題を解決するために、「言語活動の手引き」の作成と「言語活動の手引き」を活用した学習指導について、研究を進めていくことにした。

(3) 目指す研究成果

本研究を進めるにあたり、研究のゴールイメージとして、「言語活動の手引き」を活用した学習による素地育成の徹底と、学びやすさについて8割を超える生徒からの肯定的な反応を得ることと定めた。また、「言語活動の手引き」が、さまざまな言語活動を通じた指導に活用され、生徒の学習意欲を喚起して学びに向かおうとする力を高め、思考力・判断力・表現力育成が進められることを願い、7割を超える指導の立場からの肯定的な反応を目指すことにした。

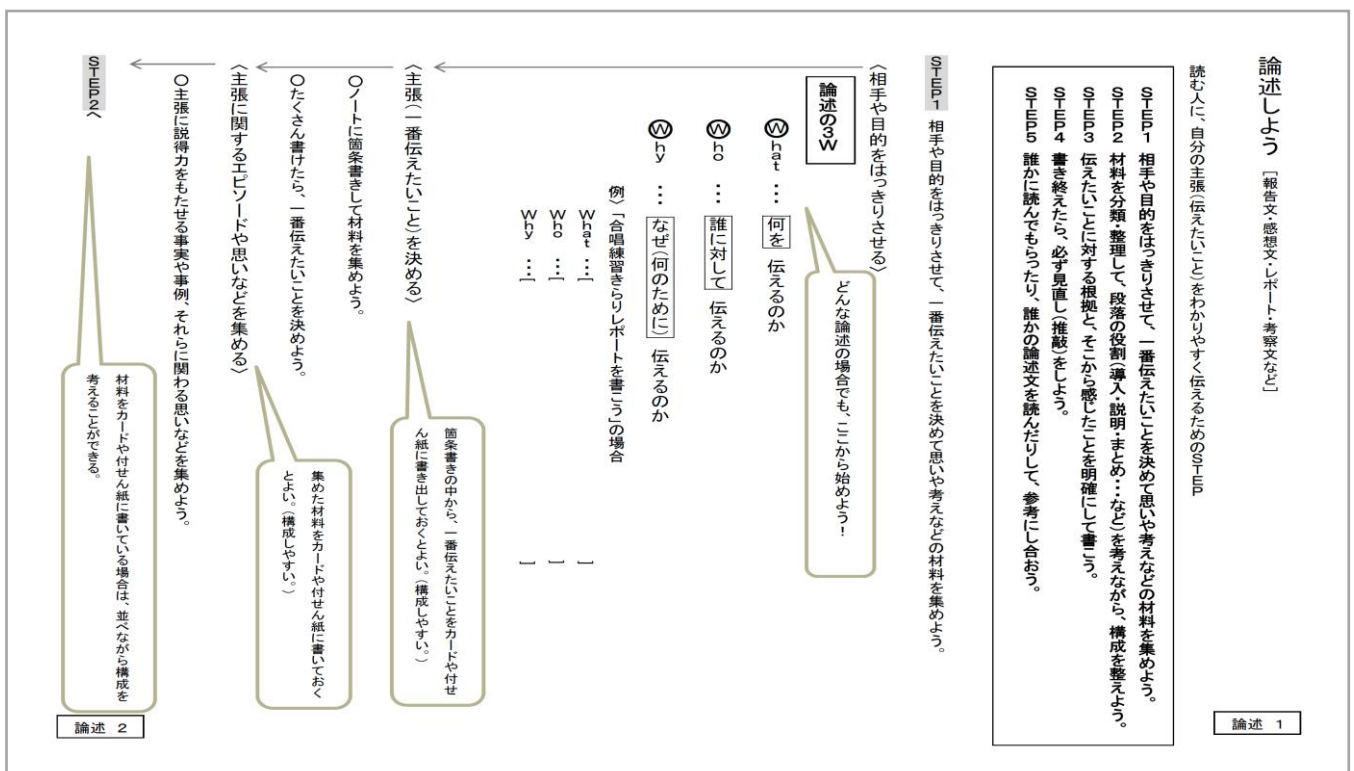
II 「言語活動の手引き」の作成と活用

1 「言語活動の手引き」の作成

実態調査で把握した生徒の実態及び指導上の困りから、国語科における「書くこと」での指導を念頭に、検証授業で取り上げる言語活動として「論述」を選び、「言語活動の手引き」を作成した。論述を行うための素地として挙げた「目的や意図を自覚する力」「集めた材料を取捨選択して文章を構成する力」「自分の考えや気持ちについての根拠の明確さを吟味する力」「書いた文章を読み返し、よりよく整えようとする力」「異なる見方から文章を検討する力」を確実に培うための手立てを整えることを目指した。

まず、資料4で示したように、論述を行うためのステップを5つに分けて示し、生徒自身が見通しをもちながら言語活動に取り組めるようにした。また、資料4の中央部分で示した「論述の3W」では、「どんな論述の場合でも、ここから始めよう」とアドバイスを添えて、書くための材料を集める前提として、「何を伝えるのか(What)」「誰に対して伝えるのか(Who)」「なぜ(何のために)伝えるのか(Why)」を確認させた。3Wという、覚えやすいフレーズを用いることで確認することに慣れさせ、論述のスタートとして相手意識と目的意識を明確にもつことの徹底を図った。

<資料4> 「言語活動の手引き」(論述1, 2)



STEP 2, 3においては、素地として「集めた材料を取捨選択して文章を構成する力」「自分の考えや気持ちについての根拠の明確さを吟味する力」を培うことをねらっており、論述を行う上で要となる学習段階であるため、じっくりと取り組めるようなつくりにした。構成の段階においては、考えの展開による分類の基本的なものとして「はじめ・なか・おわり」の三段構成を示し、要旨（主題）の位置による分類として頭括式・尾括式・双括式を図示した。また、主張（一番伝えたいこと）を支える根拠の示し方とその吟味については、モデル文による確認が有効であると考え、提示した。資料5に示したとおり、モデル文においては、主張（一番伝えたいこと）や根拠の部分を太枠や傍線によって示した。主張のよりどころとなる根拠を、具体的な事実によって明確に示す書きぶりを確認させることで、自らの論述における根拠の明確さの吟味につなげ、素地を培うことをねらった。

STEP 4, 5では、素地として「書いた文章を読み返し、よりよく整えようとする力」「異なる見方から文章を検討する力」を培うことをねらい、論述の推敲と交流におけるポイントを示した。論述の推敲においては、どこをどのように読み返し、見直せばよいかを明らかにさせるため、文章の構成についての推敲と文章の表現についての推敲とに分けて3項目ずつ示し、視点をもって

各々の推敲に向き合えるようにした。交流についても、読む視点を示し、友達との読み合いや意見の出し合いを通して素地を培うことを目指した。

2 「言語活動の手引き」を活用した学習指導

「言語活動の手引き」の活用においては、国語科の指導を生かして、さまざまな言語活動を充実させることをねらっている。したがって、その中身は、いわゆるHow toシートのように、一般的な題材・内容で組み立てられたものであるよりも、国語科授業における素地育成の足跡が残っているものである方がよいと考えた。

具体的には、資料4の中央にあるように、授業中に書き込む部分を設けることや、資料5のモデル文の内容を、国語科授業で扱う題材に即した内容で作成することなどの工夫を行った。

国語科及び各教科等における、さまざまな言語活動を通じた学習活動の中で、生徒が「言語活動の手引き」を再び手にしたとき、既習の内容を想起しながら、その際に身に付けた素地を活用して目の前の課題に向き合うことを期待している。

III 検証授業の実際と考察

1 授業の概要と検証の視点

＜資料5＞ 「言語活動の手引き」(論述3, 4)

おわり			なか										はじめ								
生	私	で	て	ん	ま	す	練	程	の	誰	に	私	わ	て	に	中	に	だ	て	ま	け
態	も	指	休	の	し	す	習	調	文	も	も	た	か	い	記	に	生	毎	ど	の	一
命	頑	示	み	の	た	充	見	整	化	知	上	ち	り	ま	録	気	日	日	思	の	年
に	張	を	く	か	。	。充	。実	を	員	ら	。私	は	や	。し	。と	付	か	の	い	の	七
練	ろ	出	合	げ	そ	実	学	を	の	な	。野	が	し	。上	。と	いた	こ	。文	。化	。返	初
習	う	し	唱	だ	れ	。練	。こ	り	と	い	。は	三	た	。野	。と	こ	。と	。委	。員	。上	命
し	よ	思	こ	習	思	。練	。こ	り	と	に	。陰	の	が	。伝	。に	。と	。課	。野	。の	。上	。合
う	い	る	と	を	い	。陰	。実	き	。行	。上	。野	。の	。が	。え	。に	。野	。の	。の	。の	。の	。の
と	ま	友	あ	て	す	。力	。行	。か	。の	。お	。ん	。を	。見	。い	。ま	。と	。を	。の	。の	。の	。の
思	し	達	り	い	。と	。く	。れ	。よ	。の	。願	。は	。先	。生	。方	。や	。三	。年	。の	。の	。の	。の
ま	。の	。の	。の	。の	。の	。の	。の	。の	。の	。の	。の	。の	。の	。の	。の	。の	。の	。の	。の	。の	。の
す	こ	の	。の	。の	。の	。の	。の	。の	。の	。の	。の	。の	。の	。の	。の	。の	。の	。の	。の	。の	。の
。の	。の	。の	。の	。の	。の	。の	。の	。の	。の	。の	。の	。の	。の	。の	。の	。の	。の	。の	。の	。の	。の
から	力	に	か	。の	。の	。の	。の	。の	。の	。の	。の	。の	。の	。の	。の	。の	。の	。の	。の	。の	。の
も	。の	。の	。の	。の	。の	。の	。の	。の	。の	。の	。の	。の	。の	。の	。の	。の	。の	。の	。の	。の	。の
。の	。の	。の	。の	。の	。の	。の	。の	。の	。の	。の	。の	。の	。の	。の	。の	。の	。の	。の	。の	。の	。の
一	。の	。の	。の	。の	。の	。の	。の	。の	。の	。の	。の	。の	。の	。の	。の	。の	。の	。の	。の	。の	。の

STEP 2 材料を分類整理して段落の役割(導入・説明・まとめ...)などを考えながら、構成を整えよう。
○考えの展開による分類

三段構成: ... はじめ・なか・おわりの三段落構成法で、最も基本的な構成法。
四段構成: ... 導入本文①本文②・結び、起承転結などの四段落構成法。
○要旨・主題の位置による分類

STEP 3 伝えたいことに対する根拠と、そこから感じたことを明確にして書く。
論述モデル文 (三段構成・頭括式)

論述 4

※主張に対して、根拠が複数あれば書いてよい。

主張「伝えたいこと」よりどうなるか
事実や事例

※具体的に書くことが大事。

論述 3

-4-

(1) 検証授業の概要

本校第1学年 166名を対象に、「合唱練習きらりレポートを書こう」という単元を設定し、全4時間で検証授業を行った。授業では、生徒にとって関心の高い行事である初めての文化祭、合唱コンクールと関連させて、「合唱練習きらりレポートを書く」ことを単元を貫く言語活動として位置付けた。合唱練習きらりレポートとは、クラスの合唱練習において、きらりと輝いていたことを、審査員に伝えるための論述文である。生徒の身近な事柄を題材にすることで、相手意識・目的意識をもたせることに有効であるとともに材料も集めやすく、「書くこと」への苦手意識の強い生徒にとっても、取り組みやすい学習になりうると考えた。材料集め・構成などの各過程においては、「言語活動の手引き」を手元に置いて活用させ、論述における手順や方法について理解させながら学習を進めていくことで、付けたい力の確かな定着を目指した。

(2) 単元計画と検証内容

まず、本単元では、「書くこと」の指導事項に沿って、「わかりやすく伝えるために、集めた材料を整理し、段落の役割を考えて文章を構成することができる」と「わかりやすく伝えるために、伝えたいことを根拠を明確にして書くことができる」を単元目標に定めた。続いて、単元計画に基づいて、全4時間の授業計画を立てた。

また、単元計画と合わせて、検証計画を作成した。『言語活動の手引き』を活用して生徒の学びを支えることによって、さまざまな言語活動を充実させ、目指す力の確かな定着を実現させることができているか「素地育成の手立てとして『言語活動の手引き』が機能しているか」ということを確認するため、授業において「言語活動の手引き」を活用する場面と、活用における成果や課題を検証する視点を整理した。それを、各時間における付けたい力及び学習活動と合わせて、一覧にしたものが資料6である。

2 授業の実際

(1) 第1時

単元のスタートにあたり、ガイドシートにおける学習計画によって、生徒に学習の目標と見通しをもたせた。ガイドシートには、単元を貫く言語活動を明示するとともに、毎時間及び単元全体の学習活動における自己評価の観点の全てをあらかじめ示すことで、生徒自身が目指す力を意識した学習を行えるようにした。

<資料6> 検証事項

時	付けたい力	学習活動	言語活動の手引き	検証の視点
①	単元を貫く言語活動に材料を集める力	1. 単元計画を確認し、学習の見直しをもつ。 2. きらりと光っていたことについて、材料を集める。 3. 一番伝えたいことを決めて「きらりカード」に書く。 4. エピソードや思いなどについて材料を集める。 5. 本時の振り返りを行い、次時の見直しをもつ。	★ 3W: What: 何を Who: 誰に対して Why: 何のために	3Wを確認することで、相手意識・目的意識をもつことができているか。
②	文章全体の見直しをもちながら、構成を整える力	1. 本時の見直しをもつ。 2. 段落構成、段落の役割について確認する。 3. カードを並べながら構成を決める。 4. モデル文と比較し、構成を見直す。 5. 本時のまとめ・振り返りを行い、次時の見直しをもつ。	★ 1. モデル文 A(三段構成・頭括式) ★ 2. B(「伝えたいこと」「根拠」)	モデル文を参考にすることで、A段落構成や段落の役割の理解を促しているか。 B段落の役割を考えて構成を整えることができているか。
③	わかりやすさを意識して書く力	1. 本時の見直しをもつ。 2. 根拠の明確さについて確認する。 3. レポートの論述に取り込む。 4. レポートを見直す。 5. 本時の振り返りを行い、次時の見直しをもつ。	★ A 論述 ★ A モデル文(根拠の明確さ) ★ B B 論述 ★ C 文体の種類・統一 推察のポイント	Aモデル文を参考にすることで、根拠を明確にして書くことができるか。 B文体に関する確認事項の理解を促しているか。 C見直し・推察の大切さへの理解を促しているか。
④	交流に意欲的に取り組む力	1. 本時の見直しをもつ。 2. 論述の交流の視点をもつ。 3. 班で交流を行い、一番わかりやすかったレポートを選ぶ。 4. 選出レポートの紹介を行う。 5. 本時の振り返りを行う。 6. 単元の学習のまとめをする。	★ 1. 論述 ★ 2. 読む視点 ★ 3. 3Wが意識できているか ★ 4. 構成は整っているか ★ 5. 根拠は明確か ★ 6. 伝えたいことはよくわかるか	論述を読む視点を明確にして交流することができるか。

次に、「言語活動の手引き」に示した「論述の3W」を確認させ、相手意識・目的意識を明確にした上で、論述のための材料集めに取り組みさせた。

学習の振り返りでは、「3Wをはっきりさせることで話がそれないように意識しながら材料集めをすることができた」「いつもは途中で目的を見失うことが多いけれど、3Wを意識することで、今回はきちんと目的を明らかにすることができた」「今までは、相手や目的がふわふわしたものだったので、はっきりさせることができてよかった」といった肯定的な反応が多く見られた。

(2) 第2時

「言語活動の手引き」に示した図やモデル文を用いて、段落構成・段落の役割について確認させ、材料の取捨選択、分類、整理を経て構成を整えさせた。

まず、構成について、考えの展開による分類の基本として、「はじめ・なか・おわり」の三段構成を確認した。また、要旨(主題)の位置による分類として、頭括式・尾括式・双括式があることを、図を示すことでとらえさせた。更に、それらを具体化したものとしてモデル文を提示し、基礎的・基本的な知識・技能を実際に活用した例を確認しながら、目指す姿をイメージさせた。

生徒は、段落構成について理解した内容を生かして、わかりやすく伝えるための構成を模索していた。そして、段落の役割を考えながら自身の論述文における構成を整えていった。「構成について、言葉だけで説明されてもわかりづらいこともあります。モデル文があったからわかりやすかったです」「モデル文で、どのような構成にすればよいかわかりやすかったです」という学習の振り返りが多く見られた。

(3) 第3時

「言語活動の手引き」に示したモデル文を参考にして、主張と根拠を明確に示すとともに根拠の理由付けの在り方をつかませ、論述に取り組みさせた。

まず、前時までには構成を整えて作成した構成メモについて、主張（一番伝えたいこと）に対して根拠が添えられているかということを確認させた。続いて、根拠が具体的で明確であるかということを確認させ、それらを整えた上で実際の論述に取り組みさせた。その際、モデル文に示された根拠の具体性や、根拠の理由付けとして添えられている思いに関する記述にも着目させ、自身の論述に生かすように促した。

学習後の振り返りには、「モデル文があったから、主張と根拠の書き方が、かなりしっかりとわかったと思います」「論述モデル文があることによって、私の苦手な文づくりがとても書きやすくなりました。文の主張や根拠などがわかりやすく書かれており、とてもイメージしやすくなりました」などの記述が多かった。実際に、モデル文を何度も見ながら、自身の文章における根拠の明確さや理由付けの有無を点検し、論述に取り組む姿が多く見られた。

(4) 第4時

「言語活動の手引き」に示した「読む視点」をもたせた上でレポートの交流をさせた。

まず、交流シートを配布し、「3Wが意識できているか」「構成は整っているか」「根拠は明確か」「伝えたいことはよくわかるか」という4点を示して、読む際に意識させた。次に、視点に沿って、◎○△を付けたりメモをしたりさせながら読み合わせ、互いの論述文に対する意見の出し合いをさせた。最後に、班での交流を経て、一番わかりやすかったレポートを選出させ、代表レポートのよかったところを全体で確認した。今後の論述において参考すべき点をつかませるとともに、振り返りの中で、各自で整理させた。

この時間には、『言語活動の手引き』に視点が示さ

れていたことによって、気を付ける点がよくわかり、代表レポートの構成の仕方や根拠の示し方のどこがよいかがあった」という振り返りが見られた。

3 考察

検証授業の最後に、ガイドシートにおいて単元の振り返りを行った。その結果、「言語活動の手引き」の活用による意欲向上、学びやすさについて、ほぼ全員の生徒が肯定的な反応を示し、単元の目標を概ね達成できたと答えた生徒は、99%を超えた。また、資料7で示した3名の生徒をはじめとして、事前の実態調査で「書くこと」への苦手意識の強さを示した生徒のほぼ全員に、意欲の高まりが感じられた。生徒の振り返りの中には、3Wを意識することやモデル文を参考にすることで、これまでよりも短時間ですらすらと書くことができたという喜びの声も多く見られ、「書くこと」への苦手意識を取り除くことに近付けたのではないかと考える。

また、全生徒のレポートにおける実際の論述でも、約82%の生徒がA及びB評価に該当し、概ね満足できると判断することができた。

4時間の検証授業を終えて、「言語活動の手引き」という手立てを整えたことが、生徒の学びを支えることにつながったと感じている。授業中の生徒の姿や授業後の振り返りからも、「さまざまな言語活動を充実させ、目指す力の確かな定着を実現させることができているか」「素地育成の手立てとして機能しているか」ということについて、一定の評価をすることができると考える。

<資料7> 生徒の反応

生徒の反応の推移（「書くこと」への苦手意識の強い3名の抽出による）

	生徒A	生徒B	生徒C
事前 (苦手な理由)	同じような言葉を続けて書いてしまうから。	うまく書くことができないから。	作文を書くときにちがう話にいたり同じようなことをくり返したりする文になるから。
第一時	3Wを知って、少しはうまく書けそうな気がした。きり集めは、今後の合唱練習でも意識してみようと思った。	普段何気なくしている合唱練習も、少しまわりを見ると、リーダーがいるんだと気付くことができた。	出来事を全部書き出してみると、みんなの頑張りが見えた。自分たちの頑張り伝えられるように頑張りたいです。

第二時	今まで、根拠を考えて材料を並べることをしていなかったけど、頭で考えて並べてみると、少し作文に近づくことに驚いた。	段落など文をつくる上で、根拠ばかりを入れすぎてはいけなかったり、思いを入れたりするなど、気を付けることがわかった。	今日は、3つの構成のやり方がわかりました。一つ一つに意味があって、構成の仕方的印象が変わるんだと思いました。
第三時	どうしたら伝わるかな、など考えた。いつもよりスムーズに書けた。	今日は、迷いながらも、今までの勉強を思い出しながら、書くことができました。	根拠の明確さを確認することができました。審査員の方にわかりやすく伝えられるように、今度は推敲を頑張りたいです。
第四時・終了後	みんなの文章を読んで、たくさん学べた。どんなところがきざりと光っていたのかがわかりやすく伝わった。3Wを意識して、根拠を考えながら書くことで、こんなにもわかりやすく伝わるんだなあと思った。	友達がどんなものを書いているのかわかって、構成もできてよかった。この勉強で、文を書くことが、そんなに苦でなくなったと思います。次からこの授業で習ったことを気を付けていきたい。	みんなと交流して、みんながどのように思っているかがよくわかりました。もともと、文を書くのが苦手だったけど、STEPを使って、一つ一つやっていくとわかりやすくていいなと思いました。

IV 成果と課題

本研究は、実態調査から明らかになった課題を解決するために、「言語活動の手引き」の作成を中心に取り組んできた。その成果と課題については以下のように考える。

1 成果

(1) 「言語活動の手引き」の素地育成における有効性

検証授業後に行った生徒対象の質問紙調査の結果を分析すると、論述する際に「言語活動の手引き」を活用し、特に役立ったこととして、「論述の3W」と「モデル文」と回答した生徒が、それぞれ約40%と多数を占めた。「要旨(主題)の位置による分類」と「STEP」と回答した生徒がそれぞれ10%弱、その他の回答として、「論述の文体」「論述の推敲」「論述の交流」における各ポイントの提示のわかりやすさを挙げる生徒もいた。

特に「論述の3W」については、各時間の授業のはじめに毎回確認し、徹底して取り組んだこともあり、「書くこと」への苦手意識の強い生徒の回答の中に、

「3Wのおかげで、ずいぶん取り組みやすかった」という多くの肯定的な反応を確認することができた。

また、少数ながら、「論述の文体」「論述の推敲」「論述の交流」における各ポイントの提示を挙げた生徒は、これまでの「書くこと」の学習の中で、自分が確実にできていなかったそれらのことについて、整理して示されていることで、「ここを見れば、次もうまくいくと思った」ということを理由として示していた。

更に、ノートに箇条書きをしたりカードに書いたりして、分類・整理する材料集めの過程における手立てについては、モデル文のように詳しく示してほしいという回答が複数見られた。それらは、検証授業での「書くこと」の学習の中で、生徒自身が目指す力を意識しながら、見通しをもって取り組んだり振り返ったりする中で意欲を高め、生じた要望であると言える。

検証授業での考察と、事後質問紙調査の分析を通して、「言語活動の手引き」は、特に苦手意識の強い生徒にとって、「書くこと」に対する意欲喚起に役立つとともに、素地育成の手立てとして有効であったと考えている。

(2) 「言語活動の手引き」の他教科における今後の活用

検証授業後には、国語科及び各教科教員対象の質問紙調査を実施した。その回答の全てにおいて、各教科等で「言語活動の手引き」を活用して言語活動を通じた学習の指導を行うことへの肯定的な反応が得られた。特に、評価が高かったのは、論述を行うためのステップを5つに分けて示し、生徒自身が見通しをもちながら言語活動に取り組めるようにしたSTEP1～5や論述の3Wであった。それらは、他教科等のレポートなどでも活用できそうだという回答が多かった。また、「言語活動の手引き」全般に対して、「さまざまな場面で活用し、論理的な思考力を付けられるといいと思う」という感想も寄せられた。「言語活動の手引き」の活用によって、他教科等での言語活動を通じた学習がスムーズになることへの期待が感じられる結果であった。

生徒の質問紙調査における回答の中でも、「国語科以外の教科等で論述することがあったとき、今回の学習を生かして『言語活動の手引き』を役に立てられそうか」という設問には、ほぼ全員が肯定的な反応を示していた。その中には、「今後、他の教科でも論述するときは、たいてい3Wを意識して書くと思う」「書くために必要なことや書くための順序が書いているので、他の教科でも同じように進めて文を書いたら、今回のようにすらすらと書けると思った」という期待感の強い記述が多か

った。更に、「理科の自由研究やレポートを書くときに、困らないですむ。大丈夫になりそう」「主張や根拠などは、理科や数学でも使うし、3Wはどの教科でも共通だと思ふ」と、具体的な場面をイメージした上で有効性について言及する回答もあった。

以上のように、「言語活動の手引き」の他教科等における活用について、指導の側からも生徒からも、概ね肯定的な反応を得ることができた。特に、学習の当事者である生徒自身の声からは、積極的な学びへの活用が行われる可能性が高いことがうかがえた。今後も、まずは「言語活動の手引き」を活用した国語科の授業で、素地育成を図るとともに活用方法の理解を促すことが必要であると考え。その上で、家庭学習や他教科等の授業において、指導の側からも生徒からも活用されていけば、更に充実した言語活動を通じた学習を実現するとともに、その中で生じた困りを解決する手立てとなりうると期待している。

2 課題

「言語活動の手引き」を活用した学習指導を国語科及び各教科等において一層充実させるためには、その内容の改良が必要であることも感じられた。

1点目は、検証授業後の生徒の振り返りの中で見られた「材料集め」の過程における手立ての不足である。題材に沿って思考し、その内容を整理する過程で、素地育成に有効な学びを支える手立てが不十分であったと感じている。

2点目は、「論述」以外の言語活動での素地分析及び言語活動例の検討不足である。今回は素地分析を「論述」単独で行ったが、研究を進める中で、言語活動における素地は相互に関連するものであると感じた。「記録」「要約」「説明」「討論」など、他の言語活動との関連も視野に入れた検討をしなければならない。

3点目は、国語科以外の教科等における言語活動の在りようについての、より充実した調査・分析である。前述した教員対象の質問紙調査での「さまざまな場面で活用し、論理的な思考力を付けられるといいと思う」という意見からは、「言語活動の手引き」への期待がうかがえる一方で、回答者の漠然とした思いが見てとれる。ここから、他教科の教員が、期待をもちつつも、実際の使用をイメージするまでに至らなかった感じが感じられた。さらに汎用性を高め、さまざまな場面で活用するためにも、充実した調査・分析が必要である。

3 今後の方向性

以上のような成果と課題を踏まえて、「言語活動の手引き」について、「論述」の部の改良を行うとともに、これを参考にしながら、「記録」「要約」「説明」「討論」の部の作成を進めていきたい。

その際には、検証授業後の生徒や各教科教員からの評価をもとに、特に評価の高かった「STEP」「3W」をベースに、段階的な学習過程や覚えやすいフレーズを取り入れて内容を整えていくことにする。

「論述」の部での検証を生かし、生徒にとっても教員にとっても、更に扱いやすい「言語活動の手引き」の作成を目指すとともに、言語活動を通じた学習が一層充実していくことを願い、今後も、国語科として培うべき言語活動の素地の育成に励みたい。

4 研究の還元

○本校国語科及び各教科教員への研究成果提供と「言語活動の手引き」を活用した授業公開。

○大分市中学校教育研究会国語部会での「言語活動の手引き」及びその活用による学習指導の充実についての提案。

おわりに

学習意欲を喚起し、思考力・判断力・表現力を育成するための手立てとして、言語活動を通じた指導の充実を目指して始めた研究であった。国語科においても、その他の教科においても、言語活動を通じた指導を充実させるためには、まず、その素地を培うことが必要である。本研究をとおして、言語活動の素地を培う国語科の指導を模索し、「言語活動の手引き」とその活用について、成果と課題が明らかになったのは意義深いことであった。すべての教科における言語活動を通じた指導が一層充実されていくことを願い、言語能力育成の中核を担う国語科として、言語活動を行う素地を培う指導を続けていきたい。

<参考文献>

大槻和夫 「国語科重要用語300の基礎知識」 明治図書 2001

文部科学省 「中学校学習指導要領解説国語編」 東洋館出版社 2008

文部科学省 「言語活動の充実に関する指導事例集-聴か、辨か、読か等の観点から-【中学校版】」 教育出版 2012

富山哲也 「<単元構想表>が活きる!中学校国語科 授業&評価GUIDE BOOK」 明治図書 2013

鶴田清司・河野順子 「論理的思考力・表現力を育てる 言語活動のデザイン中学校編」 明治図書 2014

富山哲也・杉本直美 「中学校国語科 単元を通して課題解決をめざす言語活動プラン15」 東洋館出版社 2015